
運命を呪った、あの日

龍-リュウ-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命を呪った、あの日

【Nコード】

N0312L

【作者名】

龍・リュウ・

【あらすじ】

突然の悲劇

楽しかった日々が全て一瞬にして消え

そして、彼は魔と出会う

プロローグ（前書き）

今回、初めて小説を書かせていただきます
初心者ですので読みにくかったりしますが
そこは温かい目で見守ってください）、（

プロローグ

・・・また・・・この狭い筒の中だ・・・目を開けるといつも・・・
同じ場所にいる・・・そして・・・いつも同じことを考える・・・
・・・自分は誰なんだろう、と・・・

- - -

AM 3:00

一台の黒い車が港の古い倉庫の前に止まった
車から出てきた男は倉庫の中へと入った

中には白衣を着た男一人しかいない
そして白衣の男は来客に気が付いた

「おお、これはこれはジエーム様」

男は、挨拶も無視して白衣の男に質問した

「他の研究員はどうした？」

その質問に白衣の男は口を歪め楽しそうに答えた

「いえ、なあと、サンプルが足りなくなっただもので、彼等にも協力
してもらったんですよ」

「サンプルが足りなくなっただ？ここには1000人も被験体を提供し
ただのぞ？それを全て使いきったのか？」

「はい、すみませんねえ、サンプル達ではどうも耐えきれないよう
でして、またサンプルを提供してもらえませんか？200人ほど」

「馬鹿を言うな、1000人の被験体を集めるのもなかなかの苦労だ」

ぞ、今後も100人だ、今日は視察に来たつもりだったが、研究員も使ったあたり進展はなかったようだな」
そして、男は立ち去った

プロローグ（後書き）

ふう〜なかなか疲れました

プロローグだけでは話しが全くわからないと思いますw

日常（前書き）

日常編ですw

日常

見えるのは

近所の広場でエアークンで撃ち合いをしてる二人の少年と

それを心配そうに見ている一人の少女

お互い弾が無くなり

必死に地面に落ちてている小さな弾を拾い集める

それを見て思わず笑ってしまう少女

「…ろ…きろ…おきろ…こら、起きんか！」大きな声が頭に響いてくる

「ん、んあ？」

「んあ？じゃない！授業中に寝るな！起きろ狭間あ！！」

「うわあああ！？」

「よし狭間、この問題を解いてみる」

先生の怒鳴り声で完全に目が覚めたものの、問題はどちらにしろわからない

「う…わ、わかりません」

「はあ…もういい座りなさい。もう寝るんじゃないぞ」

そう言うと先生は静かに授業を再開した

（懐かしい夢だったなあ…たしかアイツが引越した日の夢だ
アイツが引越す事になったので

俺と空とアイツの3人で荷物が積み終わるまで遊ぼうってなったんだ
その日は、どっちが空をお嫁さんにするかってなってエアークンの

撃ち合いになったんだ
八八ッ、あれってどっちが勝ったんだっけな
もう、思い出せないな
一人で思い出に浸っていると
黒板の文字は、さっきよりも進んでいたの
俺は急いで書き写した「しかし、子どもの頃とはいっても、ありや
相当恥ずかしいよな」

キーンコーンカーンコーン

授業終了の合図とともに先生は教室を出て行った

「眠いな…だけど、まだノートを書き終えていないぞ、俺よ
だが睡魔さんの相手もしてやらないと可哀相だよなあ
うん、よし

さらばノートよ！俺は今から夢の世界へと旅立つぜ！」

そして、俺が頭を伏せようとしたとき

「ダメだよ、ちゃんとノート書いてから寝ないと」と隣りの席から
幼馴染みの道野 みちの 空 そら の声が聞こえてきた

「ねえ？聞いているの？ちゃんとノート書かないとダメだつてば」
俺は仕方なく起き上がり

「空様やあ、ワシは睡魔様には勝てませんのじゃあ〜」
反論することにした

「もう、ふざけてないで早く書く！」

さすがは、我が幼馴染み
爺さんネタは素無視かよ

「はいはい、わかりましたよ書きますよお」そして、俺は素直にノ
ートを書き始めた

キーンコーンカーンコーン

「ふああああ、やっと授業という地獄が終わり自由になったぞお！」

「あははは、大袈裟だなあ、レイは」

「大袈裟なんかじゃねえ！明日を耐えきれば明後日からは待ちに待った冬休みなんだぞ！明日からは睡魔さんとも平和条約を結べるんだあ！」

「まあ、たしかに寝れるのは嬉しいよね

誰かさんを起こさなくても大丈夫だし」

それを言われては言い返せない

「ぐう、それなら冬休み明けからは必ず自分で起きてみせる！」

「おお、よく言えましたあ」と空が嬉しそうな顔で笑っている

帰り道も、そんな馬鹿話しを続けながら歩いていると

もう家の前に着いてしまった

そして、俺の家の隣りを見ると空が寂しそうな顔で自分の家の玄関を見つめている

空の両親は学者で二人とも、出張などでたまに家にいない事があったけど、今回の出張は長かった

なんでも、デカい研究らしく

アメリカの方に2年前から移っているのだ

空一人を日本に残して

「空……」

「あつ、ゴメンぼーっとしてたかな？あはは」

両親が家にいなくなってから

空はよく、寂しそうな顔を見せるようになった

「よし！クリスマスは何処かに遊びに行こう！空は何処か行きたい所あるか？」

「ホントに！？じゃあ、映画行って、買い物行って、ご飯食べて！
あとはあとは…」

「わかった、わかった、他にもあるなら、それは当日に追加だ」
「うん！」

そして、俺と空はそれぞれの玄関をくぐった

日常（後書き）

疲れたorz

見慣れた日常の終わり

クリスマス当日

約束通り俺と空は映画を見て

買い物をしていた

「レイは、こういう服とかも似合うと思うよ」

「いや、待て、それはアロハシャツじゃないのか？まだ早くない？」

「零進は、こっちの方が似合うんじゃないかなあ」

背後から聞こえた声に俺と空は振り向いた

そこにはアイツがいた

小さい頃に引越してしまった神導^{しんどう} 紅満^{こうま}が

「紅満……」

「やあ、久しぶりだね」

「コウ君だ！コウ君久しぶり！」空が素直に喜んではしゃいでいた
そこからは、ゆっくり話しをする事になり

近くのファーストフード店に入った

「だけど、ホント久しぶりだなあ、今まで連絡もよこさないで何処
に住んでたんだ？」

「今は、またアメリカに住んでるんだ

今日は、たまたまこの街に来れたから懐かしくて歩いていたら君達
を見つけたんだよ」

「スゴい、偶然だね！ううん、これはもう奇跡だよ！」

「ははは、大袈裟だなあ空ちゃんは」

（よかった、紅満と会えて空も元気が出てるぞ）

そして、ファーストフード店を出て

3人で家の方まで歩く事になった

「はあ、ここまで結構距離があっただね」「紅満は、街を離れて

随分経つから

街の記憶があやふやなんだろおな」

「あーっ！！さっきの店に携帯忘れてきちゃった！！」

「お前は、なんでこんな歩いてから気付くんだよ」

「ゴメンね、今から取りに行ってくるから二人は先に歩いてて！」

「わかった、わかった、早く取ってこいよ」「ゴメンね、コウ君も、すぐに取ってくるから！」

「うん、構わないよ

急ぎすぎて、こけないでね」

そして、空は一人逆走していった

二人になつてから

随分と歩いた

すると紅満が妙な質問をしてきた

「そういえば、空ちゃんの治療術はまだ使えるのかい？」

治療術：それは、空が昔から持つてる妙な能力

普通の人間じゃ絶対に使えないような妙な能力

「治療術か：最近使ってる所見てないけど使えるはずだぞ」

「そうなんだ、昔はよく怪我とかした時にあの力で治してもらったよね」

「ああ、俺もお前もしょっちゅう怪我してたからなあ」

「そうか、そうか、やはりここに戻ってきて正解だったよ」

突然、紅満の声が冷たくなった

「それがどうかしたのか？」

「いや、こつちの話したよ、それよりも後ろを見てごらん面白いモノが見られるよ」

俺は言われるがままに後ろを見た

その時、空から何かが街の中心へと落ちた

その「物」が街へと落ちた瞬間

光に包まれた…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0312/>

運命を呪った、あの日

2010年10月9日13時21分発行